

# 少子化時代の小児看護に求められるもの

福岡県立大学 看護学部講師 宮城由美子

## 1. 外来を訪れる子どもと家族

少子化により小児医療の現場は大きく変動している。近年出生数の低下は著しく、平成17年の出生数は106万2604人、合計特殊出生率は1.25とまた前年度を下回った。子どもの数が減少することで子どもに対する期待が大きくなる反面、核家族化の進行や地域での連帯意識の希薄化などにより母親の社会的孤立が進み、育児不安をもたらしている。

また、社会の情報化が進み、多様な育児雑誌やマスメディアやインターネットを通じて育児情報があふれかえり、育児書だけが頼りだった時代とは様相を異にしている。不安を解消するための育児情報がさらなる混乱をもたらし、母親たちの不安感はますます助長されている。

ワーン、ワーンと泣く子どもの手を引きながら連れ立ってくる親子、生まれて間もない子どもを大事そうに抱っこしてくる母親、おじいちゃん、おばあちゃんと家族一同で小さな子どもに連れ添ってくる家族など、小児科外来を訪れる家族は少子化社会ならではの独特の雰囲気をもっている。

平成14年の厚生労働省「患者調査」で、入院する子ども(0～14歳)は約37,000人、外来受診が635,100人である。入院する子どもの約20倍もの子どもが、外来を訪れている<sup>(1)</sup>。少子化といえども小児科診療受診数は平成11年には619万回と平成4年の1.35倍に増え、6歳未満の受診数も1.5倍と増加している<sup>(2)</sup>。

現在小児医療については、在宅医療と救急医療が外来看護の中核をなすと考えられている。

子どもは家庭にいたことが最も自然だという考えから入院期間の短縮が図られ、以前であれば入院加療していた子どもが在宅療養へと移行している。「悪性腫瘍の終末期の子ども」「気管カニューレを装着している子ども」「在宅酸素療法中の子ども」「化学療法中の子ども」など多様なニーズを抱えている子どもと家族が、現在は外来を訪れている。

また昼間の患者より診療時間外や救急診療を受診する子どもと家族が増加する傾向にある。これらの背景には、母親の社会進出、少子化による親の育児知識や体験の不足など社会的要因がある。受診する子どもは、不慮の事故等で緊急性が高いものから、ちょっと熱が出ただけの軽症の者など多種多様である。

それらの外来のいくつかのケースからは、たとえば「気管支喘息発作が生じて、受診のタイミングがわからず、悪化してから来院する」「親は傍観者のように無言で付き添い、祖父母が子どもを抱え一生懸命病状を伝える」「アトピー性皮膚炎の子どもを〇〇温泉に入れていいのかという電話相談をしてくる」「離乳食を食べてくれないから与えていない」など、家庭看護としての機能が欠落しつつあることがうかがわれる。

そのような家族はすべてを専門家に委ねる傾向が強く、「不安だから自分の気持ちを聞いてほしい」「今どうしたら良いか教えてほしい」「電話で相談にのってほしい」「受診のタイミングについて教えてほしい」など、さまざまな思いを外来場で訴えてくる。

## 2. 外来における小児看護の現状

何らかの健康障害をきたした子どもが、最初に訪れるのが外来である。外来では短時間のなかで多くの子どもや家族に対してケアを展開していくことが求められる。

厚生労働省「保健・衛生行政報告」によると保健師、助産師、看護師の全体就業数は併せて約120万人である<sup>(1)</sup>。現在医療機関数、一般病院小児科3,528(全体の約43%)、診療所小児科は26,788(全体の約29%)という数字から判断すると、約11万人が小児を対象にした外来での看護師として従事していると推測できる<sup>(3)</sup>。

子どもと家族の看護をする看護師の役割として、筒井は①細心の注意 ②子どもの状況把握 ③基本的ニーズの援助 ④成長発達の促進 ⑤子どもの発達段階に合わせた説明 ⑥個々の子どもに合わせた工夫 ⑦家族へのかかわり ⑧チーム医療 ⑧システムの変革などをあげている<sup>(4)</sup>。

小児看護の現場では、看護師は「子どもへの援助」「子どもへの説明」「家族への対応」を難しいとらえていることが報告されている<sup>(5)</sup>。さらに山元らは、病棟における総看護業務時間を比較し、小児看護は成人看護の2倍の時間がかかり、小児の患者の4割は危ない行動が観察されていることも報告している<sup>(6)</sup>。

このことから子どもとその家族を看護する上で、看護師は子どもと家族の状況を把握することが重要となる。そのためにはコミュニケーション能力を高めるだけでなく、危険回避が不得手な子どもの未熟さを把握するとともに、医療行為はもちろん日常生活全般に配慮をしていくことが必要となる。

## 3. これからの外来における小児看護

外来では短い受診の時間での判断、そして相談・指導をしていかねばならない。看護師は患者や家族に対し、フォーマルにもインフォーマルにも、常に何らかの形で相談・指導を実施しており、個別のケアを実施する上で外来看護の役割の中核をなすと及川は述べている。さらに、外来の看護相談は近年さまざまな形で実施されているが、看護相談の定義や機能についてはあまり明らかではないとも述べている<sup>(7)</sup>。

外来では患者及び家族のニーズを的確にそしてスピーディに察知し、対応していかねばならない。そのためには高

度な専門的知識と技術をもち、さらには状況を把握し、マネジメントできる能力が求められる。これらの役割を担えるのは日本看護協会が認定している小児看護専門看護師であろう。専門看護師の直接的実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究等の機能を発揮し、質の高い看護を展開できると考えられる。

平成18年8月現在、小児看護専門看護師は16人であり、普及にはまだ時間がかかる。しかし、今後近い将来に、中核的医療機関における小児看護専門看護師が、地域の診療所などの外来看護師への指導やマネジメントをしていくことになると考えられている<sup>(8)</sup>。

少子化時代においては、専門医療の必要性の増加にともない小児専門看護への要求が増大している。「子どもの権利とニーズを擁護していく支援」「患児と家族のQOLを重視した在宅医療への移行にともなう支援」「医療の高度化にともなう日帰り手術や治療薬の進歩による外来治療中心への対応」「小児救急におけるコーディネート」「NICU退院児に対する訪問看護」「健康な子どもの子育てにともなう新しい育児世代への対応」などが求められている。

なかでも慢性疾患や障害をもった長期療養を必要とする子どもたちは、医療費抑制のもとで在院期間が短縮され、また、専門的技術を要する治療や処置が家庭で行われるようになり、地域や学校で生活することが可能になってきた。家庭においてこれらの専門的な治療処置を行うためには、知識技術の指導だけでなく、患児および家族の多大なる不安の軽減をはかっていくことが必要となる。外来看護は子どもたちが生活している場つまり教育・福祉・医療をつなぐ役割を担い、その重要性和責任がますます増大している。

また、子育てにともなう新しい育児世代への対応として、病児保育（乳幼児健康支援一時預かり事業）や育児支援などが展開されている。平成3年より厚生省心身障害研究「小児有病児ケアに関する研究」がスタートし、当時14施設であった病児保育室は、380施設を超えるようになった。現在医療機関併設型の施設は380施設のうち138施設（63%）を占めている<sup>(9)</sup>。また医療機関における育児支援は多く展開されており、そのため看護師は医学、看護のみの知識・技術提供でなく、保育的な素養を身につけ、看護と保育の専門性を補完していくことも求められている。

以上のことから外来における看護はルーチン化した業務ではなくなってきている。限られた時間の中で、子どもや家族の状況をアセスメントするためにも、待ち時間を有効に使った情報収集、家族への知識や技術の提供などの指導、および相談援助を行っていくことが重要となる。また診療中の看護として、診療および処置の介助、診断・検査の説明においても、医療処置を受ける際の「心の準備」いわゆるプレパレーションを外来においても実施することで、医療の質を高め、同時に患児にとって最善で効果的、効率

的な診療ができるように医師と協働していくことも重要となる。

小児外来の対象である子どもと家族は、時代の流れとともに変化している。子どもの「育つ力」は普遍的と思われるが、親・社会の持つ「育てる力」は変化していると思われる。そのため子どもの育つ力とうまく噛み合わせるためにも、外来の看護師は医学的知識そして技術はもちろん、社会の変化に敏感になり、子ども、家族の潜在的ニーズをキャッチできるような、より優れた能力が求められてきていると考える。

#### 参考・引用文献

- (1)：厚生統計協会；厚生指針 国民衛生の動向52(9)2005
- (2)：http://members.jcom.home.ne.jp/3754001601/my\_paper/shinpo4093\_62\_2002.html
- (3)：病院小児科医の将来需要について；日本小児科学会、2005
- (4)：筒井真優美編：小児看護学、日総研、145-152、2004
- (5)：藤井裕治、他：小児病棟の現状 さらに増してきた看護の重要性、看護教育41(6)、423-427、2000
- (6)：山元恵子、他：小児看護に時間と人員を要する理由、小児看護27(4)、2004
- (7)：及川郁子：今、外来が果たす役割について、小児看護26(3)、2003
- (8)：http://www.nurse.or.jp/nintei/cns/index.html
- (9)：帆足栄一：必携 新病児保育マニュアル、全国病児保育協議会2005